外国研究の現在と未来

吉田研作 編

Ed. Kensaku Yoshida

Research in Foreign Studies

Today and a Look to Tomorrow

Sophia University Press

上智大学出版

外国研究の現在と未来

2010年3月31日　第1版第1刷発行

編　者：吉　田　研　作

発行者：高　祖　敏　明

発　行：Sophia University Press

上智大学出版

〒102-8554　東京都千代田区紀尾井町7-1

URL：http://www.sophia.ac.jp/

制作・発売　㈱ぎょうせい

〒136-8575　東京都江東区新木場1-18-11

TEL　03-6892-6666　FAX　03-6892-6928

フリーコール　0120-953-431

〈検印省略〉　URL：http://www.gyosei.co.jp

©Ed. Kensaku Yoshida

2010. Printed in Japan

印刷・製本　ぎょうせいデジタル㈱

ISBN978-4-324-08890-6

(5300135-00-000)

[略号：(上智) 外国研究]

NDC 分類040

目　次

外国語学部50周年記念誌刊行にあたって　吉田研作

第1部　外国語学部の現在と未来

1　記念講演

浦元義照　地球規模の貧困　多国籍協力の必要性と国連の役割……3

旦まゆみ　これからの上智大学外国語学部で大切なことは？……14

漆原朗子　言語力を軸とした学部・学科教育の（再）構築……17

内田　雅　私が外国語学部で学んだこと……20

2　シンポジウム　外国語学部の現在と未来……25

第2部　外国研究の現在と未来

1　グローバルな世界に生きる……43

人、国、地球……デヴィッド・ウェッセルズ　43

世界の民主化を比較する……岸川　毅　56

国際経済の変容と途上国問題

多様な国際社会の共生をめざして……今井圭子　65

クローン人間を作ることは許されるか？……浅見昇吾　75

2　さまざまな地域、さまざまな社会……85

アメリカ・オセアニア・イギリス地域研究

……小塩和人、アラン・ペイシェンス、東郷公徳　85

民衆から教育を学ぶ

―ブラジル北部におけるフィールドワークより

……田村梨花　96

ロシア現代政治入門……上野俊彦　105

インドの最も美しい伝説

―ナラとダマヤンティーの愛の物語……シリル・ヴェリヤト　120

3　奥深い「ことば」の世界……137

ことばのサイエンス：人間の本性の理解に向けて……福井直樹　137

言語聴覚障害学とその周辺……進藤美津子・平井沢子　150

社会言語学……木村護郎クリストフ　160

太平洋地域におけるフランス語……シモン・テュシェ　170

スペイン語の変異……アントニオ・ルイズ・ティノコ　178

4　さまざまな「ことば」を学ぶ意味……189

応用言語学見地から見た英語習得について……坂本光代　189

ポルトガル語との出逢い……エレナ・H・トイダ　204

ことばが誘うアジアとの出会い

―フィリピン語教育奮戦記……川島　緑　213

哀しくて、やがて面白、アラビア語……赤堀雅幸　223

執筆者、シンポジウム参加者一覧

上智大学外国語学部には、英語学科、ドイツ語学科、フランス語学科、イスパニア語学科、ロシア語学科、ポルトガル語学科の６学科と、国際関係副専攻、言語学副専攻、アジア文化副専攻という三つの副専攻（専門分野）があります。

各学科および副専攻（専門分野）では、それぞれの分野の専門家が教育、研究にあたっています。「読む」「書く」「聴く」「話す」という外国語の四技能を徹底的に訓練する科目から、専門的な文献を講読する科目、通訳の実技を学ぶ科目、世界のさまざまな国、地域の歴史や、その実情を研究する科目など、多様な内容の科目が開講されています。

第２部では、外国語学部の先生方に「グローバルな世界に生きる」「さまざまな地域、さまざまな社会」「奥深い『ことば』の世界」「さまざまな『ことば』を学ぶ意味」という四つのテーマで、文章を寄せていただきました。専門的な内容を含んだ論文に近いものも、啓蒙的なエッセイに近いものもあります。どれも一般読者を対象にした、読みやすい文章で書かれています。

1　グローバルな世界に生きる

人、国、地球

デヴィッド・ウェッセルズ

はじめに

世界について学ぶには多くの時間と労力が必要です。新生児が動き回ったり発音したりすることを学ぶことを考えてみれば容易にわかるでしょう。そして学校に入れば、生徒はそれぞれの多様な関心に応じて多くのことを学びます。我々は学習に必要な時間や労力をあたりまえのこととして受け止めがちですが、学習は自動的なプロセスでは決してありません。教育とは、知識、価値、そして感情といったいくつかの要素を結びつけて人間の理解力にまで高めるというチャレンジにほかなりません。それは開かれた思考、心、そして独創性を必要とするのです。

このエッセイの読者はすでに世界について多くのことを学んでおり、さらに多くのことを学ぼうとしている人たちでしょう。私が考える本書の読者の特徴をいくつか示してみましょう。

まず、皆さんはすでに日本語を何年も勉強してきているはずです。そして日本語を学ぶ過程で「外国語」を日本語から識別するのに必要な何らかの文化的特性を身につけているはずです。もちろんある人にとっての外国は別の人にとっては本国です。つまり文化は私たちの基本的な経験に根ざしているのです。興味深いことに「国」という漢字は外国語という言葉の中にも使われています。実際、ある言語は数多くの異なる国で広く話されており、世界中で話されているといってもいいくらいの言語もあります。そして国内で異なる言語が用いられている国もあります。言語と国とは必ずしも１対１で対応しているわけではないのです。あとで私が議論したいと思っているもう一つの問題は、国がそれぞれの人にとって異なる意味をもつということです。

読者はまた上智大学や外国語学部といった組織にも関心をもっていることでしょう。このエッセイを読み終わるころには、皆さんは上智大学の国際関係論についても何らかのイメージをもつことになると思います。1969年以来、外国語学部は国際関係論を勉強したい学生に対して国際関係副専攻というプログラムを提供し、最近では、専門分野としての国際関係研究を設けました。また、大学院には国際関係論専攻があり、現在ではグローバル・スタディーズ研究科の中に位置づけられています。

国際関係論ときくと直ちにいくつかの考えが頭に浮かんできます。一般的には国際（international）という用語を用いる場合、国（countries）というものが存在することをあたりまえのように考えがちです。私たちは世界あるいは地球という用語も用いますが、これらの用語から連想することがらと、国際という言葉から連想されることがらが、若干異なることについては多くの人の賛同を得ることができるでしょう。私はあえてこのエッセイのタイトルを「人、国、地球」としましたが、それはこの三つの用語がわれわれ自身や世界について異なる視点を提供してくれると考えたからです。この三つの視点は国際関係を学ぶに際して非常に啓発的といえます。

以上述べたことを要約すると次のようになります。読者の皆さんには、日本の文化と日本を超える何かについての皆さん自身の好奇心をもって、このエッセイを読んでいただきたいと思います。自分と世界について学ぶにつれて、皆さんは国や世界を意識するようになり、「国際的」ということが何を意味するかについて関心を持つようになり、上智大学ではそれがどのように考えられているかを見てみようという気になるでしょう。私がこの問題について以下で述べることをどうか辛抱強く読んでもらいたいと思います。

People（人）

日常生活で人々が行うことを描写することは気が遠くなるような作業です。人々は考え、そして話します。彼らは歌を歌ったり、踊ったりもします。ものを作ったりそれを交換したりします。人々はこのようにして相互関係をむすび、公的な生活を繰り広げるのです。これらのことを勉強しながら、私たちは哲学や文化、経済、政治、宗教などについて語ります。現在において人間の過去を研究することは、歴史を研究することであり、人間の潜在力は芸術の形でさまざまに表現されています。科学は私たちの周りの世界についての知識を与えてくれますし、技術は私たちが世界を私たちのために変革することを可能にしてくれます。人間は無数のやり方で世界の中で行動するのです。

私がこのエッセイを書いているときやみなさんがこれを読むときに行（おこな）っているように、人間は自分自身と世界について思索をめぐらせます。私たちが人生を共有するとき、私たちの主観的な理解は間主観的（intersubjective）理解になります。もしあなたが「猫が好きである」と言い、私が「犬が好きだ」と言うならば、私たちはおそらく人間の好みは異なるものだと考えて相手を尊重するでしょう。しかしながらもし強国の支配者が周囲の弱国を征服したいと思った場合、それは弱国の国民にとっては全く違う問題を意味します。独立を保ちつつ自分たちの事柄は自分たちで行うという選好は、隣国の支配者とは異なるばかりでなく、その支配者が自分たちに対して何をするのかについての懸念、恐怖、不安の原因ともなるのです。

人々の価値観や選択はたとえそれがささいな事柄に関するものであっても互いに異なる可能性があります。時には協力しあうことが容易にできますが、時には互いに対立し紛争に至ることもありえます。これはさまざまなレベルで生じますが、ここでは国際関係において生じる問題について説明したいと思います。使節団を互いの国に対して送るという単純な友好関係として国際関係をとらえることもできますが、戦争といった複雑で敵対的な結果を招くこともあるでしょう。人間は土地や資源のような物質的な価値を重んじるのみならず、象徴や思想のような非物質的なことがらをも重視するので、協調や紛争の可能性は人間行動の広い範囲において生じるのです。

私たちが国際関係の歴史を振り返るとき、稲を育てたり船を造ったりする方法を共有することは過去常になされてきましたが、同時に他の人々を征服することも行われてきました。国家間を旅行するために必要なパスポートが考えだされてからわずか200年くらいしかたっていませんが、文化や宗教、

政治制度によって形作られた人々のアイデンティティーは何千年も前にさかのぼることができます。近代では人々が自分たちを国に関連付けるやり方や国を通して相互関係を取り結ぶやり方に特別な注意がはらわれてきました。こうして私たちはこのエッセイの次のテーマ、すなわち国に到達しました。

Countries（国）

国の概念は大昔にさかのぼります。世界のさまざまなところで人々は国が彼らにとって何を意味するかについての彼らの考えを何千年にもわたって発展させてきました。古代ペルシャやアテネ、ローマ帝国や漢王朝で育まれた国についての考え方はそれぞれ全く異なるものです。実際、今日でも人々は自分の国が何であり、何であるべきかについて全く異なった考え方を持っています。おそらく日本人は自分の国をいくつかの異なったレベルで考えているのではないでしょうか。たとえばある人にとって国とは信州（長野県）であったり、日本であったりします。他の人にとってはもちろん国とは日本ですが、その人にとって「日本」とは長い歴史をもつ文化を意味するかもしれないし、また他の国との間に経済的政治的関係をもつ政治的単位としての意味をもつかもしれません。読者の皆さんにとって「国」とは何でしょうか？

私たちが国際関係を学ぶとき、「国」の定義がすぐに問題となります。たとえば、スペイン国王がアメリカ大陸で「新しいスペイン」を宣言するとき、それは国王の個人的な所有物としての意味をもつのでしょうか。あるいはスペインの領土の一部を意味するのでしょうか。あるいはもっと何か別のものを指すのでしょうか。太平洋の小さな島であるニューカレドニアはフランスの行政単位であり、「フランス」という国の一部として扱われます。しかしそうでしょうか？これらのいくつかの問題を解決する一つの方法は、国（countries）ではなく国家（states）について語ることです。これは私たちが国際関係を学ぶ際に有益な仕掛けですが、それ自体問題を含むことも確かです。

近代国家の歴史にはある軌跡がみられます。イタリア半島に存在する政治単位間で14世紀に用いられていたstatoという用語が現在に至るまで受け継

がれているという軌跡です（ここで注意していただきたいことは、私は「イタリア」という言葉を使っていない点です。イタリアという国家は19世紀後半にはじめて成立するからです）。この間、多くの歴史的、法的、政治的、文化的変動が生じました。もし15世紀フィレンツェの市民が突然今日のシカゴのダウンタウンに連れてこられて、「21世紀のアメリカ合衆国という国家（stato）におまえは今いるのだ」と告げられたら、彼は混乱するどころの話ではないでしょう。

過去数世紀の間に国家はその内部から変化し、町や耕作地の様相を失い、行政権のもとでコントロールされ固定的な境界をもった領土のようなものになりました。国家の支配者たちは、彼らの国家は自律性を持っており、他国は彼らが行うことに干渉する権利はないと主張するようになりました。そして国家の中で生きる人々は国家に対して忠誠心をもつべきである、あるいはお互いにひとつの「民族」を構成するメンバーとして忠実であるべきであるという考え方が定着してきたのです。

これらの「国」（countries）は何をするのでしょうか。今日では国は紙幣を印刷し、税金を徴収し、軍を動員し、経済政策をたて、法を執行したりしています。国に関する政治モデルが過去３～４世紀の間、とりわけ18世紀末から19世紀初頭にかけてヨーロッパを中心として広がっていき、さらに19世紀末から20世紀末にかけて帝国主義や脱植民地化を経て広がっていくと、近代国家の標準モデルというものが歴史の流れの中で形作られることになりました。このプロセスはまだ終わっていません。決して終わることはないのです。これらの国々（countries）の政治、社会、経済などを比較する数多くの事例を、この終わることのないプロセスは私たちに示してくれます。

ここから「国際」（international）というもうひとつの用語へと議論は発展していきます。今日使われている「国際」という言葉は、これまで私が説明してきた歴史や制度と切り離しては意味を持ちません。実際、国際という言葉は19世紀末まであまり使われませんでした。そして「国際関係」や「国際関係論」という言葉は20世紀初頭に用いられたものです。しかし国際という言葉ではなく国際という概念が意味するところを考えてみましょう。いっ

たん何千年も前の国々の中で一部の集団が他の集団と自分たちとは違うと考え始めたとき、「国際」ということが生じる可能性が出てきます。そして、近代国家や国民国家が形成されたとき、国家間、国民国家間の相互関係も今日あるような形で生まれたのです。人々のアイデンティティーは、ひとりでに形成されるのではなく、他者との間の間主観的関係において形作られます。国家間の関係については、国際社会や国際システムとよべるような関係が国や国家について語る際の前提となります。すなわち人も国もアイデンティティーを相互関係から築いていくことが多いのです。

The Globe（地球）

ようやく私たちは世界全体に到達しました。世界についても私たちはさまざまな方法で語ることができます。「世界」という言葉を聞いたとき、海や山を思い浮かべるでしょうか。それとも天候や自然を思い浮かべますか？あるいはまた、現在や過去においてこの宇宙に存在したさまざまな国民でしょうか。今日では人々はしばしば「グローバル化」について語ります。この言葉について以下で少し説明してみたいと思います。このエッセイで地球という言葉を用いたのも、この「グローバル化」の問題と関連しています。この言葉は、私たちの内部にさまざまな反応を引き起こし、これまで説明した人々や国と結びついた思考パターンに組み込まれています。

皆さんはこれまでによく「地球儀」(a globe) を見たり、手で触ったりしたのではないかと思います。それはどのような地球儀だったのでしょうか？青色や茶色、緑色で示される海や大陸、山や川を示していましたか？それとも異なる色で示され、黒い国境線で領土の範囲を明確にされた異なる国を示していましたか？皆さんは地球儀を回転させ、地球が太陽系の一部であることを思い出したのでしょうか？他の場所から自分がどれくらい離れているかを知るために距離を測ったりしたのでしょうか？おそらく皆さんは自分の知っている人が住んでいる都市を探したかもしれませんね。地球儀とは私たちの地球について学ぶ絶好の道具だと言えるでしょう。それは私たちの想像力を刺激し、私たちが知りあった人々のみならずまだ知らない人の人生を考

えることを可能にします。

話を地球儀から地球に戻すと、いかに私たちが人、国、地球といった異なるレベルの問題を想像できるかがわかると思います。それぞれのレベルは特定のものの見方や理解を必要としますが、すべてのレベルは結びついています。それらは私たちが意識するしないにかかわらず、私たちの人生に影響を及ぼします。たとえば、私が列車に乗って友人に会いに行き食事を一緒にするとしましょう。私はおそらくだれが鉄道を発明したかとか、車両の原材料がどこから来たかなどということに注意をはらうことはないでしょう。食物の原材料がどこから来たかということやレシピについても心をわずらわせることはないでしょう。実際、もし私がこうしたことに関心をもち、探求し始めたら私は残りの人生すべてをつぎ込まなくてはならず、その結果、友人との食事は決して実現しないでしょう。

私たちの地球ではすべてのことが結びついて全体を構成しています。それは、生態系が有限であるからではなく、地球上に住んでいる人々の生活が交差しているからです。何世紀もの間、人々は国に「所属している」と考えてきました。今、私たちはグローバル化する世界、すなわち地球に「所属している」と感じるようになってきています。そのためある人々は混乱し、おそれおののいていますが、他の人々は希望や勇気に満ちていると感じています。

上智大学における「国際関係論」

国際関係論という学問の分野は、このエッセイでこれまで私が述べてきた問題をすべて扱います。先生方はこれらの問題すべてを一度に扱うことはしません。個別の問題がそれぞれの授業や本や論文の中で扱われます。歴史や政治、経済や文化、社会行動や人間の思考、軍事や法といったさまざまな領域が国際関係論の中に含まれるのです。この短いエッセイの中でこれらすべての領域について説明することはできませんが、私は上智大学で学ぶことができるいくつかの問題について概観してみたいと思います。

まず、国際関係副専攻の講義科目から話を始めましょう。国際関係論、国際関係史、外交政策、国際経済学、国際社会学、戦争と平和、比較政治学、

比較社会学、グローバル・ガバナンスといった講義科目があります。もちろんこれら以外の科目が上智大学の他の学部学科では開講されていますが、ここでは副専攻の科目に限定して説明したいと思います。

ある講義科目には「国際」という言葉が含まれ、他の科目には「比較」や「グローバル」という言葉が用いられていることに皆さんはすぐにお気づきになるでしょう。これは皆さんを混乱させるためにそうしているのではなく、地球や世界について学ぶ際に異なるアプローチがあることを示したいからこうした異なる言葉を用いているのです。もちろん、これらの用語ですべての異なるアプローチを代表させているわけではありません。

「国際」と「グローバル」の違いについてはすでに述べたとおりです。多くの場合、これらは明確に区別することはできません。人々が自分や世界をどのようにとらえるかが変化しつつある現代においては特に区別しにくくなっています。

「比較」は何が「国際」であるかを学ぶ際に重要な手掛かりを与えてくれるでしょう。一般的に比較できることがらは二つ以上の国の中に見出すことができます。それは政治や経済であるかもしれませんし、文化や法、あるいは他の視点かも知れません。しかしたいていの場合、研究対象となる活動が行われる場所は異なる国でしょう。したがって比較研究を「国際」「グローバル」といったもっと大きな枠組みの中に組み込むことができるのです。

いくつかの事例

大学の授業で扱われるトピックは年とともに変化します。国際情勢の変化とともに、講義科目名は同じでもその内容はかなり変わります。たとえば、過去数年間のあいだに歴史上の劇的な変化が国際関係論にも大きな影響を与えました。1989年にベルリンの壁が崩壊すると、東欧の人々が西ヨーロッパを旅行することが容易になりました。そして米ソ首脳がマルタで会談し、「冷戦」の終結が宣言されたのです。40年以上にわたって国際関係論のクラスで主要なテーマであり続けたトピックが突然消えたのです。

2001年9月11日にテロリストがニューヨークの世界貿易センタービルとワ

シントンの国防総省を攻撃したことは世界中を震撼させました。これらの出来事はそれから何週間にもわたり主要なメディアを通じて報道され、学校ではそれまであまり関心が払われなかったテロリズムや非政府アクター、宗教や、非対称的な紛争などが一挙に注目を浴びることになりました。2008年にはアメリカの住宅ローンに端を発した金融危機が世界中に伝播し、政界経済を不況へと導くことになりました。誰もが以前よりも注意深く各国の金融制度および国際金融制度を検討し始め、グローバルな金融に対する規制への関心が集まることになったのです。

もちろん、国際関係論は毎日のニュースにあらわれる時事トピックに対するコメントにとどまるものではありません。国際情勢に関する長期的な傾向や基本的なパターンを理解するための枠組みは時間をかけた研究の産物であり、これこそ国際関係論がめざすことです。難しい問題にどのようにアプローチしたらよいかは、人によって考え方が違うでしょう。そして、人、国、地球に関するおびただしい数の研究方法が専門家によって提唱されてきたのです。

たとえば、戦争は国際関係論の主要テーマの一つです。ある人は国際システムに戦争の生じる原因を求めます。別の人は戦争を起こしやすくする原因を国内に求めます。またある人によれば戦争は国家間の武力紛争にとどまらないもっと複雑な現象です。事実、最近の戦争は国内で生じる戦争の様相を濃くしています。このような国内で生じる戦争は国家間で生じる戦争と全く異なるものであると考えるのは行き過ぎかもしれません。しかし戦争の規模や内容について、この二つのタイプの戦争は非常に異なることも事実です。戦争はまた、戦闘員が負う法的義務の観点からとともに、参加者の道徳的規範という観点からも研究されてきました。

多くの研究者は世界史の研究や毎日の新聞に登場する「戦争」の概念はよく知っているのですが、国際関係論の研究者がいったん「戦争」について問いはじめると、彼らは往々にして異なる方向に目を向け始め、よりよく問題を理解するための更なる概念をつくり始めるのです。実際、戦争にこれほどまでに人々が関心を払う理由は、戦争が非常に興味深い研究テーマだからで

はなく、戦争が安全を脅かすものだからです。したがって、戦争を研究する研究者のより大きなコンテキストは「国際安全保障」であったり「人間の安全保障」であったりするのです。この短いエッセイでは、これらの概念を詳しく検討し、問題に対する答えを見出す過程でいかに人々がいくつかの異なる方向に導かれるかを説明する余地がないのが残念です。

もう一つの研究領域は経済です。生産と消費、貿易とビジネス、貧困と開発などが主なテーマとして取り上げられます。これらのテーマに関する本は図書館に行けば山のようにあります。世界経済はあらゆる場所に住む人々の生活に影響を与えるがゆえに、大きなチャレンジといえます。世界経済は国際関係論にとっても大きなチャレンジです。というのも経済において生じるさまざまな問題は政府の中だけで起こるのではなく社会の中で生じるからです。このため、戦争を分析する際には真っ先に政府と軍隊が念頭に浮かぶのに対して、それとはかなり異なる視点が経済分析には必要となります。国際経済においては多くの協力関係が政府間にも人々の間にもみられます。そのような協調なくして飛行機は各国の領空を横断して安全に飛ぶことはできませんし、財は遠距離輸送によって運ばれることもないでしょう。人々は市場における交換を可能にする通貨を持つこともできないでしょう。

全ての人々や国が政治や経済において完全に意見を一致させることができるのであれば、ある種の調和が存在することになります。これはしかしすぐには起こりそうもありません。幸いなことに全くの不調和も存在しません。どのような集団も協調から何らかの利益を得ることができるからです。グローバルな環境がその一例です。宇宙の生態系は全ての人に影響を及ぼすものです。環境汚染は特定の人々にとって、他の人々以上に直接的な影響を及ぼしますが、実際は全ての人々が地球の澄んだ空気やきれいな水や地質によって恩恵を受けるはずです。政治的経済的な持続可能な発展は、ここ数十年で国際関係論の一つの主要テーマになりました。交渉はしばしば困難に直面し、その結果は理想的なものには程遠いのが通常です。しかし環境に関するグローバルな交渉は続けられ、合意形成の努力がなされているのです。

交渉は外交という相互関係を通じて行われます。外交は関係方面を代表する

る複数のアクターが集まったところで生じます。長期間にわたって国家の数が増えていくと、ヨーロッパの慣例の中から外交のプロトコルが確立されていきました。しかし今日においても新しい外交の新しい形態がうまれており、たとえば、国際フォーラムや国際機関の中に見出すことができます。外交関係は国家のみならず非政府組織（NGO）あるいはEUなどの組織をも包含した形で展開されるようになりました。情報革命もまた外交に大きな影響を及ぼしました。

人々は国際関係や世界政治を150年以上にわたって発展してきた国際組織と結びつけて理解しようとします。世界貿易機構のような国際貿易のルールをつくる組織もあります。また、世界保健機構のようにエイズの感染を防いだり、鳥インフルエンザや最近の新型インフルエンザ（豚インフルエンザ）など世界規模で流行する病気を防いだりする組織も重要です。最も重要なものは言うまでもなく国連です。国連は国際安全保障に第一義的な責任を負っています。そしてその他の分野（たとえば気候、環境、開発）においても重要な役割を果たします。2000年に採択されたMillennium Development Goalsは以後モニタリングされ、2015年までに達成すべき非常に野心的な国際基準を設定しました。

過去60年以上にわたってさまざまな活動が行われてきた分野に人権があります。人権が認められるまでには数百年の歴史を要しました。思想家たちは人権概念を構築し、国家による法的な人権保護がゆっくりと進んでいきました。しかしながら、第二次大戦終結から現在にいたるまで大きな変化が人権をめぐって生じました。この間、人権を助長し、擁護するための国際規範や国際機関が飛躍的に整備されたのです。これこそが、人、国、地球の結び付きの典型的な例だといえるでしょう。人権は人々に帰属するものであり、制度によってつくられたものではないと言われています。人権擁護の基準がどのように歴史的に進展してきたかは国のレベルに見出されます。グローバルな基準として、人権は国のレベルを超えて地球上に住む人々を結びつけます。こうした傾向が将来的にどのように進展していくのかは不透明ですが、人権が国際関係論や世界政治に大きなインパクトを与えたことは疑いのない

事実です。

人の移動は最近多くの人々の関心をひくようになったトピックです。先に述べたように、ベルリンの壁の崩壊と冷戦の終結はこの人の移動の問題に密接に関係しています。難民問題は軍事的、政治的経済的状況と結びついた大問題です。経済的な目的のために人々が移動するとき、あらゆる文化接触やグローバル化の過程が生じます。国際関係にとどまらず、人類の歴史の多くはさまざまな物質的精神的目的を追求して人々が移動するところから生じるものと言えるでしょう。

最後に、国際関係論の「比較」の側面について少し説明します。何かを比較することは大昔から行われてきた方法です。私たちのエネルギーや経験は限られているために、私たちがあまりよく知らないことを、知っていることと比較することから多くを学ぶことができます。また、比較することによって相違点と同時に類似点をも知ることができ、比較していることがらについてのより深い洞察を得ることができます。

たとえば、今日私たちはよく「デモクラシー」について語ります。どのようにして民主主義国がデモクラシーという政治体制を確立したのでしょうか。そもそもデモクラシーとは何でしょうか。一定期間における複数の国における政治変動を研究することによって「民主化」のプロセスを見た場合に、私たちはデモクラシーという複雑な政治的社会的現実についてより正確に理解することができるでしょう。

比較の視点で経済や社会を見ることも同じような意味で重要です。ある国はある特定の経済政策をとることによって豊かになりましたが、それほど成功を収めたとは言えない国もあります。教育や健康保険制度や所得の平等といった点でよりよい成果をあげた国もあれば、そうでない国もあります。これらの分野における実際の政策や成果についての国際比較は知的に面白いだけでなく、実践的な重要性をも持っています。

おわりに

世界について学ぶことは私たちすべてにとってのチャレンジです。国際関

係論という分野において国際関係を学ぶことは特に面白くわくわくするようなチャレンジです。人、国、地球は勉強の世界への入り口なのです。

（翻訳　樋渡由美）